

解答

- ① 1 縄 2 快い 3 指示 4 志 5 因果
6 任せる 7 条件 8 登録 9 岐路 10 観点

- ② 問一 1 C 2 A 3 B 4 B
問二 1 ① な ② い ③ く 2 ① げ ② こ
問三 1 口 2 音 3 矢 4 気

- ③ 問一 A ア B エ 問二 ウ 問三 イ
問四 1 聖歌隊～まない(くんで) 2 セっち～たえる(くんで)
問五 [キャンドル・サービスで町をあるくと] 誠が聖歌隊にはいったと仲間に知られて、クラスのやんちゃボスのメンツをつぶすことになるから。

- 問六 ウ 問七 エ 問八 ア 問九 ふとっちょのクマ 問十 イ

- ④ 問一 A エ B ウ C ア
問二 1 おとなしすぎ 2 シャベリすぎ 問三 1 こいピン 2 はずむよ
問四 1 アりがきらい 2 不安 3 うれしそうに 4 安心
問五 1 エ

2 じぶんはひかりに、この団地のことも、野枝自身のこともすきになってほしいと思っているということ。

- 問六 ア 問七 イ 問八 野枝はじぶ 問九 [ひかり] イ [野枝] ウ

解説

- ③ 出典は、今江祥智「首まきグマ」(『今江祥智5年生の童話1』〈理論社〉所収)。

問一・問二 A…誠は本当は「せっちちゃんの横でうたえるから」(2行め) 聖歌隊のれんしゅうや、日曜のおまいりにまじめに参加していたのですが、その気持ちがせっちちゃんに知られないよう、わざと「おまえにだまされてつれてこれ、だまされてこうしてうたわせられてるんだ——といった顔」(3・4行め)をしていました(問二→ウ)。空欄直後には「せっちちゃんも、そんな誠の気もちに気づくわけもなかったとあるので、「だから」があてはまります。B…「うまくかくしてのけた」(13行め)→「クリスマスイヴがこまる」(15行め)と食いちがう内容なので、「ところが」。

問三 傍線部直後にあるように、転校生のせっちちゃんが学校に慣れてくるにつれてわかってきたのは、誠が「クラス一のやんちゃ(=活発でいたずらな子供)」であるということです。

問四 1…「それ」とは、「誠が、聖歌隊のれんしゅうと日曜の礼拝をやすまない」(8行め) ことですね。
2…誠が「聖歌隊のれんしゅうと日曜の礼拝をやすまない」本当の理由は、問二でもみたように、「せっちちゃんの横でうたえるから」(2行め)でした。

問五 「誠は、じぶんが聖歌隊にはいったことも、日曜に教会へでかけること、そこでうたうことも、やんちゃ仲間にはかくして」(9・10行め) いました。でも、クリスマスイヴには聖歌隊はキャンドル・サービスで町をあるくことになっているので、そうなれば聖歌隊にはいつていることが仲間に知られてしまい、「クラスのやんちゃボスのメンツをつぶすことになる」(12行め)のです。

問六 「てきめん」とは、「^{こうか}効果や^{けっか}結果がすぐにはっきり出ること」です。

問七 「せっちゃんの顔がぼんやりとうるんで見えた」(24・25行め)とあるので、「あいつ」とはせっちゃんのことだとわかります。

問八 「こんなめにあう(熱がひどくなった)のも、あいつ(せっちゃん)のせいだぞ」(26行め)と、誠は熱が出たことを、本来まったく^{かんけい}関係のないせっちゃんのせいにしています。このように、^{はら}腹を立てたときに^あ関係のない人に^ちまで^あ当たり^ち散らすことを「八つ当たり」といいます。

問九 ハラマキの上にセーターを着こみ、せっちゃんにもらった首まきを目の下までまきつけた誠は「ふとっちょのクマ」(36行め)^{ひょうげん}と表現されています。

問十 誠はわざと^せかぜをひいた^せいでせっちゃんといっしょに歌えず、くやしい気持ちで電柱のかけから行列を見ていました。「来年のきょうは仲間の前を、せっちゃんとならんであるいてやる」ということは、「来年はキャンドル・サービスの行列に^{どうどう}堂々と参加する」、つまり「聖歌隊にはいっていることを仲間にかくすのをやめる」と誠は決心したのです。

④ ^{しゅってん}出典は、^{いちかわさくこ}市川朔久子「^{まじよ}しずかな^{いわさきしよてん}魔女」〈岩崎書店〉。

問一 A…「それ(一度だけなでさせてくれたの)は、^に煮^ほ干しを持っていたとき」(41行め)とありますから、「偶然」という意味の「たまたま」。B…「すぐにべつ^ぐの場所に目を向け」(49行め)アリを見つけてかけよっている様子なので「さっそく」。C…^の今^えまで野枝といっしょに^{わら}笑っていたひかりが、急に「しんみょうな(=まじめな)顔」(90・91行め)になっているので、「ふと」があてはまります。

問二 1…野枝は、いつもまわりの人に「おとなしすぎて言われる」(106行め)ので、ひかりもそう思わないかと「急に^{きやく}心配になった」(1行め)のです。2…^ふ逆^{あん}にひかりは「あたしは、しゃべりすぎかな?」(92行め)と不安に思っています。

問三 「まるで花^{ちよう}か^と蝶が飛んでるみたい」と野枝が感じているのは、「こいピンク色のぼうしが、野枝の前をはずむように走っていく」(10・11行め)様子です。

問四 野枝は、クラスの子と同じようにひかりも「アリがきらいだったらどうしよう」(56行め)と「不安」でしたが、アリを見たひかりの目が「うれしそうに^{かがや}輝いている」(59行め)ので「安心」しました。

問五 1…野枝はここまでに2回あやまりますが、2回ともひかりは「なんであやまるの?」と笑います。自分の^{せきにん}責任でもないのに野枝がいちいちあやまるのが^{ふしぎ}不思議でおかしいのです。2…野枝が「ようやく^す気づ」(78行め)いたのは、「この^{だんち}団地のことも、野枝自身のことも」「新しい友だちに^す好きになってほしいと思っている」(79~81行め)ということです。「新しい友だち」とは「ひかり」のことですね。

問六 ^{ぼうせんぶ}傍線部直前に「あれー? くつつかない」(85行め)とあるので、「さわるとベタベタする」(71行め)ツツジの葉っぱに、アリがくつつかないことを「おかしい」と思っているのです。

問七 問五でも見たように、野枝は、^{すなお}素直で思ったことを^{こうかん}とどろんどろ口にできるひかりに^{こうかん}好感を持っています。

問八 「あたしは、すごいうれしい。野枝ちゃんがいる」(103・104行め)と言われうれしくなった野枝は、「ツツジの葉っぱをちぎってシャツの胸に^{むね}貼りつけ」、「おそろいのシールみたい」(115・116行め)にしてひかりとの友だちの^{あかし}証にします。

問九 登場人物の言動を手がかりに、性格を考えましょう。ひかり…いろいろなものに次々に興味を持ち、あちこち野枝を^つ連れまわしています→イ。野枝…問四・五・八で見たように、言葉にはしませんがひかりの気持ちを思いやることができます。自分でも「話すのがきらいなわけじゃない。ただ、ぴったりな言葉を取り出すのに、人よりちょっと時間がかかる」(109~111行め)^{ぶんせき}と分析しています→ウ。